

巻頭言

コロナ禍で進行する “新しい分断”とふたつの未来

伊丹 謙太郎 (法政大学連帯社会インスティテュート教授／協同総研理事)

世界中を襲っているCOVID-19の問題は、今も私たちの仕事や暮らしに多大な影響を与え続けている。特に、いつ／どのように収束を迎えるのか不透明な現状をめぐって私たちは身動きがとれなくなり、これからの社会をどう創るべきなのか掴みきれないでいる。しかし、コロナ禍以前にも日本社会はたくさんの課題が山積していたし、これが消えたわけではない。本号の座談会で日本医療福祉生協連の馬場康彰常務が指摘されているように、わが国の医療政策が抱えてきた慢性的課題がコロナ禍で劇的に噴出する事例がある一方で、コロナ禍で足踏みしている間に水面下でさらに深刻化している問題も多いはずだ。

さて、私がこのコロナ禍で最も危惧しているのは、パンデミックが人びとの生活を一律に覆っているかに見えて、むしろその影響や受けとめ方に断裂があることだ。感染リスクを抱えつつ社会を支え続けるエッセンシャルワーカーの物語と、リモートワークによる新しい生活の提案のふたつが同じ番組で報じられていることに対し、私自身はいまだに戸惑いを隠せないでいる。

列島に広がる自粛・謹慎ムードの下で、

各々が自身の環境・職場を守るのに必死であるという次元では一様に見えながら、体験するリアリティは極めて分極化されている。「ソーシャル・ディスタンス」というスローガンは、就労環境の異なる者たちの間を見えないヴェールで覆い、これまで以上に深い溝を生むことに寄与しているのではないだろうか。

コロナ禍における労働者としてのリアリティは次のように(現実にはもっと複数に)分断されつつある。(1)そもそもコロナ前からリモートワークに従事していた人びと、ギグワーカーたち。(2)コロナ禍で打撃を受けながらもリモートワークの導入など、新しい環境へと適応しようとする人びと。これまでのあり方を変更することが困難であるなかで、(3)リスクを負ってでも仕事を継続せざるを得ない人びと、(4)事態の収束まで不安を抱え休業する人びと、失業してしまった人びと。この四者が、それぞれに別様のコロナ禍のリアリティを生きている。恐れるべきは“全人類を襲うパンデミック”という表象の下で、他者への想像力を枯渇させ、水面下では同じ街で暮らす身近な人びとの間にすら分断が広がっていることである。先月号の特集は

(4)、本号掲載の座談会は(3)の人びとが直面する現実と対応策が議論されているので、以下では(1)(2)に焦点を絞って考えてみたい。

ポストコロナの社会を予見させる新しい生活様式。ワイドショーや週刊誌で特集が組まれるほどであるから、コロナ禍でリモートワークへと大きく舵を切った者、出勤日が半減し自宅で作業する者などなど、オフィスワーカーを中心に相当数の労働人口がここには含まれる。私自身も春学期の全授業がオンラインとなり、自宅が職場になった。教育機関の多くはコロナ前の日常へと戻る機会をうかがっているという点で、暫定的ライフスタイルだが、情報通信系の企業を中心に、このままりリモートワークを恒常的な選択肢とし、そもそも物理的なオフィスを無くそうという向きもある。(2)のグループの一部では、リモートワークを見越して郊外や田園風景のある村へと転居先を探し、実際に転居した人びとも増えている。しかし、このような選択は正しいものであろうか。私自身も経験した失敗を例に挙げながら、拙速に新しい生活様式を語る前に、私たちがこの暫定的な非日常の下で失いつつあるものに光を当ててみたい。

学生の顔がみえないコロナ禍において、「学生の学びを止めてはならない」という使命感から多くの大学教員が遠隔授業に心血を注いだ。その結果は、課

題をこなす学生の生活がパンクするという皮肉で悲壮な事態を生んだ。教師の目にはリアルな学生が映っていなかったのだ。座談会で大学生協連学生委員長の矢間裕大さんは「#大学生の日常も大事だ」というツイートを例に、社会に自分たちの苦境を知ってほしいという大学生の嘆きを語ったが、学生の生活への想像力を欠如させた「社会」には教員自身も含まれていたのだ。教師もまた心理的・肉体的にも疲弊しているが、彼らの疲れが遠隔授業という「新しい働き方」への適応(2)からくるものであるのに対し、学生は遠隔授業(2)とバイトを失う(4)に引き裂かれた状態にある。学生との間にある隔たりに気づかない事例は、述べてきたコロナ禍で水面下に広がるリアリティの分断の典型的なものと言える。

大学も含めたコロナ禍で各所に発生する行き違いは、逆説的に「コミュニティ」(大学においてはキャンパス、多くの企業においては職場)がいかに重要なものであったのか再認識させる。リモートワークによって職場の人間関係から解放されたように見えるが、真実は、私たちが共に根ざす場としてのコミュニティを失いつつあるのではない。職場の存在しない労働が今後の生活様式なのだとすれば、それは人びとの紐帯の喪失、人格的交流なき労働なのかもしれない。同じ職場での職位や雇用形態の違いが差別や紛争を生んだのがコロナ前の格差社会批判であったなら、個人は会社とだけ契約

で紐づき、コミュニティなき分業という働き方が主流化するポストコロナ社会ではこの問題は生じない—そこでは、労働者同士のぶつかり合いはないが、誰がいつ退職したのかも知らされない。

以上は架空の未来社会などではなく(1)の人びとがコロナ前から体験している世界である。職場という物理空間はなく、電子端末で随時業務が流れてくるUber、Amazonといったプラットフォームビジネスの最末端で働くギグワーカーたち。雇用契約もなく自営業主でもない、雇用類似と呼ばれる働き方を選択した人びと。自転車で街を走り回るウーバーイーツのドライバーたちは、移動中の怪我や交通渋滞による遅配などのあらゆるリスクを自分自身で背負い、雇用労働者よりもはるかに弱い立場にある。このようなコミュニティなき労働の世界がコロナ禍で伸長し(2)をも飲み込んでいくかもしれない。

最後に、(1)の人びとが先行して格闘し、動き出そうとしている物語に触れて、むすびとしたい。ウーバーイーツで働くことを選択した人びとのうち、少なくない者が職場での人間関係に苦手意識を感じたり、自分自身のペースで自由に働ける環境を望んでこの仕事に就いたという。しかし、誰にも干渉を受けない一方で、すべてが自己責任である孤立無縁の

働き方を続けるなかで、彼らは逆に失ったものの大切さに気づく—お互いを支え合い理解し合える仲間、ともに連帯できるための職場やコミュニティ。昨年10月、東京でウーバーイーツユニオンの設立総会が開かれた。団体交渉権の確立が当面の目的であるが、数度にわたる要求書はいずれもUber側からは門前払いの対応で現在に至っている。ユニオンも選択肢のひとつだが、海外ではプラットフォームビジネスにおける雇用類似の労働者同士の間に関連を構築する「プラットフォーム協同組合主義」という新しい協同労働運動が世界的潮流となりつつある。リモートワークの広範な導入は、(2)の人びとを(1)の働き方へと押しやる一面があることは間違いない。ユニオン結成は新しい就労形態をこれまでの主流の権利保護の下へと押し戻す運動方針であるが、プラットフォーム協同組合主義は、逆に新しい環境下で、別の協同や連帯構築の道を模索する運動となる。いずれの闘い方も、目指すものは労働者同士の人格的交流が成立するコミュニティの確立であるという点では共通している。ポストコロナで生まれる新しい働き方が、単に労働者をより脆弱な立場へと分断するだけに終わるのか、その先に新しい連帯や協同を創出する方向へと反転する契機はあるのか、コロナ禍において考えるべき大きな問いのひとつであろう。